

# 安楽寺だより

第 29 号

紙面内容

2 面	資料館「ピースあいち」を見学
3 面	本山報恩講参拝のご案内
4 面	日本仏教史⑫ 明治時代(中)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

## 二河白道のたとえその③

正しく水火の中間に、一つの道あり。闊さ(幅)四、五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交わり過ぎて道を湿(うる)おす。その火焰また来りて道を焼く。水火あい交わりて常にして休息なけん。

善導大師の説かれた『二河白道のたとえ』のおはなしを続けます。浄土往生の道を求める人は、火の河・水の河の真ん中に『正に一つの白道がある』と、白道の存在に気づきます。

『その幅は四、五寸』とは、道が誠にかすかなものにしかならないのです。親鸞聖人は「四大、五陰にたとうるなり」と申されています。四大とは、地水火風のことで、人間の身(肉体)をあらわし、五陰とは、色受想行識のことで、人間のこころ(精神)をあらわします。つまり、人間の身と心を意味するのです。

人間は遠い昔から業縁の積み重ねで生きています。それをもとにあれこれ物

## 「水火の中間に一つの白道あり」

事を考えています。私たちはこれまでの体験・経験にとらわれ・しぼられて生きています。

『白道』は浄土からこの世に通ずる道であり、この世から浄土に通ずる道であります。

『この道は東の岸から西の岸まで、その長さは百歩』とは、人間の一生を意味しています。火の河・水の河と唯一の白道とが、自分自身の生涯の中にあらわれてきたのです。私たちは業縁にしばられて、苦しみ・悩んで生きています。しかし、同時に一生涯お育てがあります。悩み・苦しみがあることこそ、そこに生きることの深さや豊かさが開かれ感じられてくると教えられます。

『白道』を歩むことは、実は火の河・水の河を生活の中で、生涯をかけて受けとめ、引き受けて生きることなのです。

「水火の中間に一つの白道あり」



『水の河の波浪がしぶきをあげて道を湿す』とは、貪欲・貪りのこころに執着して、どこまでも自分の思いどおりにすること、自分の生きが証しにしたいのが私たちです。わが思いが満たされれば(2面に続く)

(1面より) それでいいと思いで生きてい  
る身には、「わが身を痛み、わが身を問うこ  
ころ」が起こりようありません。  
「火の河の火焰が燃え上がってきては、  
道を焼く」とは、怒り・憎しみのこころの  
炎が、私たちを育ててくださる仏さまの教

え(宝物)を焼きつくし、無意味にして、歩むべ  
き道(白道)のありかをかき消しているのです。  
出口なき人生のまことの原因はそこにあります。  
す。そのため『白道』が見えてこないのです。  
次回からは、具体的におはなしが展開されて  
まいります。

## 戦争と平和の資料館

# ピースあいち見学

先日、テレビなどで報道されました戦争と平和の資料館「ピ  
ースあいち」(写真左)を見学しました。訪問した日は、大阪の  
小学生が社会見学で来館していました。係の方が、展示物や解  
説のパネルを小学生たちにわかりやすく説明をして、子供たち  
はメモをとりながら熱心に聞いていました。



ピースあいち

第二次世界大戦当時、名古屋は軍需工場が多く、  
焼夷弾投下による空襲で甚大な損害があった展示に  
衝撃を受けました。現在でも中東シリアなどでは、  
空爆によって多くの市民が殺され、避難の人々が難  
民として周辺国へ押し寄せ、大きな社会問題になっ  
ています。

日本は、一八九四年(明治二十七年)日清戦争か  
ら一九四五年(昭和二十年)の敗戦まで、五十年以上  
侵略戦争へ国民を駆り出し、他国に甚大な被害を与



社会見学の子供たち

えてきました。この戦争という「負の遺産」  
を決して忘却してはなりません。

「ピースあいち」では愛知県下の空爆被害  
のほか、戦争によって失われた命の写真、戦  
時下の人々の暮らしの様子、そして現代でも  
世界各地で起こる戦争の現実を丁寧に解説  
されています。

昨今の、北朝鮮のミサイル発射に対して過  
度に危機感を煽り「ならず者は懲らしめるべ  
きだ」との風潮は、一歩誤れば、戦争が勃発  
する危険性ははらんでいます。

平和な世界に生きたいとの思い・願いか  
ら、二度と戦争を起させない決意を持つこと  
が大切だと思います。

誰でも自由に見学できますので、「ピース  
あいち」に訪れてみてはいかがでしょうか。  
○「ピースあいち」

名東区よもぎ台

二・二八〇

○開館日・時間は

火曜日・土曜日

十一時～十六時、

○閲覧料

大人 三〇〇円

小中高生 百円

○電話 (〇五二)

六〇二・四二二二



館内の写真パネル





延暦寺根本中堂

11月26日(日)に

本山御正忌報恩講

参拝いたします

京都・東本願寺で営まれる報恩講に今年も参拝いたします。親鸞聖人の御真影の前に、対面して着座すると、いまの私自身の生き方が問われて、忙し忙しと暮らしているが、それでいいのか？との聖人のお呼びかけが、正信偈のお勤めを通して聞こえてきます。ぜひお出かけください。本山参拝のあと、延暦寺に参拝します。ご参加ご希望の皆様は、安楽寺までご連絡ください。

### 比叡山延暦寺とは？

平安時代初期の七八八年(延暦七年)に最澄によって開かれた天台宗の総本山。日本仏教史によると、平安京遷都の頃、奈良の旧仏教寺院に対抗する桓武天皇が遣唐使を派遣し、その一人として学んだ最澄が比叡山に天台宗を開創しました。同時期には、空海が高野山に真言宗を開き、密教を説きました。

延暦寺は大乗仏教の道場として、多くの僧侶が修行に励みました。比叡山での修行は「戒・定・慧」の「三学」を学ぶ」と言われてきました。「戒」とは、戒めという意味で、

### 秋墓彼岸法要参拝ありがとうございました

9月20日 八事霊園で彼岸法要をお勤めました。供養墓の法要には多くの皆様にご参詣を頂きました。ありがとうございました。



仏道を歩む者の生活規範。「定」とは、定めるという意味で、心の乱れを抑えて精神を安定させようとする修行。「慧」とは、仏の智慧を身につけ、惑いを断ちきって真理を悟る修行。この「三学」を段階的に修行して、悟りに近づいていくことが求められています。

親鸞聖人は、九歳で比叡山に登り、二十九歳で山を下りるまで二十年間仏教を深く学ばれました。その修行で聖人に見えてきたのは、「三学」のどれも徹底できないという自分のすがたでした。大乗仏教は、「すべての人を救う」教えであるのに、「この私一人救われぬ」。自分自身において成り立つ救いを求めて、苦悩の毎日を送られていたに違いありません。

# 仏教豆知識

第二十九回



## 日本の仏教

歴史 その⑫

### 明治時代(中)

明治二十二年（一八八九年）大日本帝国憲法の発布によって第二八条に「安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務を背かざるかぎりに於いて」という条件付きで、信教の自由が認められることになりました。しかし、この条文は「王法・仏法相依」の思想や護国思想を根底とするもので、宗教への国家統治の関わりに大きな問題を残すことになりました。

明治政府の政策を推進する中に於いて、東本願寺との関わりを示す二つの動きがありました。

一つは北海道の開拓と開教です。幕末以来のロシアの北辺進出に対応する必要に迫られた明治政府は、殖産政策の遂行や道路整備の推進のため、多額の資金を

必要としました。資金を調達するための一つに、東本願寺の力を利用しようとした。

当時の東本願寺法嗣・現如は、北陸や東北地方を回って、献金と移民を募集し、明治三年（一八七〇年）北海道に渡り、札幌に仮堂を建て、そこを拠点として開拓を開始しました。

開拓の目標として、「新道切開、移民奨励、教化普及」の三項目をかかげ、まず街道（本願寺街道）の開削を行いました。道路改修が進むにしたがって、多くの移住者が北海道に渡り、東本願寺の教線も拡大し、明治終わり頃には、寺院が三三〇余力寺になりました。



本願寺街道起点碑(北海道伊達市)

『国豊民安、兵戈無用』との言葉が無量寿経の中にあります。仏教が広まれば武器を用いることが無く、国や民は豊かであるという意味です。▼過去の戦争に加担してきた大谷派宗門は、平成二年、不戦決議で「民族・宗教の違いを越え、戦争を許さない豊かで平和な国際社会建設にむけて歩むことを誓う」と表明しました。▼昨今の日本の政治状況は、「国難突破・国を守る」といって危機意識を煽り、憲法九条改正・安保体制強化など、平和追求への国民の願いがないがしろにされかねない雰囲気醸成を醸し出しています。▼仏教の説く非戦主義を広くお伝えすることが仏教者の使命だと改めて思う今日この頃です。